

# 20世紀前半における 日本の鮫鰯網の伝播と 朝鮮漁民の受容 キグチ漁業の特徴と鮫鰯網技術の変容

The Stow Net Fishing Developed by Japanese Fishermen and Introduced to and Accepted by Korean Fishermen in the Early 20th Century : Characteristics of Yellow Croaker Fishing and Transformation of Stow Net Fishing Techniques

吳 昌炫

室井康成 [訳]

OH Chang-Hyun Translated: MUROI Kōsei

はじめに

- ①朝鮮後期、西海でのキグチ漁の技術的特徴
- ②20世紀という転換期における日本の鮫鰯網の導入と変容
- ③キグチ漁の持続と鮫鰯網技術の変容

結論

## 【論文要旨】

本稿は、1900年頃に日本の九州地方から伝播し、近年まで韓国西南海岸域において広く使用されていた鮫鰯網技術の変容過程を、1970年代まで韓国（および朝鮮）西海の漁民の主要な生業であったキグチ漁の技術と慣行の持続という観点から理解しようとしたものである。まず、韓国のキグチ漁において、鮫鰯網の構造と原理がよく似た在来式の漁具である中船網と柱木網の技術的特徴を検討した。次いで、19世紀中・後期に日本の九州北西部の小さな湾港において開発された鮫鰯網が、日本人漁民の出漁によって朝鮮へともたらされ、実際に操業を始めて以降、それが朝鮮においていかに変容し、受容していくかという点を考察した。そして最後に、各種の有形資料とともにフィールドワークによって得られた人々の証言を検討することにより、鮫鰯網と鮫鰯網漁船の変容過程が、本来、九州の漁民たちの必要に応じて鮫鰯網が朝鮮へ伝播してから、次第に朝鮮人漁民のキグチ漁慣行に合わせる形で変容したという、言わば文化的変容過程であったということを主張した。

【キーワード】鮫鰯網の技術、鮫鰯網漁船、技術の伝播、技術の受容と変容、キグチ漁慣行の持続